

# 新疆ウイグル自治区のウイグル族における結婚式の変容 ——アトシュに住む家族三世代の事例から

国際社会環境学専攻

アブドゥルシュクル

アブドゥルラフマン

阿布都西庫尔

阿布都熱合曼

## The Transformation of Uyghur Wedding Ceremony : a Case Study of the weddings in three generations of a Family in Atush, Xinjiang Autonomous Region ABUDUXIKUER ABUDUREHEMAN

### Abstract

Rapid economic development and the various political reforms in administration and policy have taken place in the past 20 years in China, resulting a vast change in people's living environment, society, religious order, kinship relation, and so on. Accordingly their fields of activity have been spreading, the contents of activity have been diversified, and their values and ideas has been changing. In this condition, the transformation of their traditional ethnic culture should be inevitable.

This paper takes up the marriage ceremonies of three generations of an Uyghur family living in Atush town in the southern part of the XinJiang Uyghur Autonomous Region, to present the changes of Uyghur cultural tradition. It aims to reconstruct and describe the three marriage ceremonies of three generations from the intensive interview carried out in September 2004. The interview data is supplemented with the author's own observation data in the region. Then the paper analyses the background of the changes found in these three marriage ceremonies, and tries to find out the main factors of these changes.

### Key Words

Uyghur, Anthropology, Social Movements, China

はじめに

I. 調査地と調査対象の概況

II. 家族三世代の結婚

III. 結婚式の変化とその要因

おわりに

はじめに

「結婚」という言葉はどんな言語においても記念すべき、喜ばしいことの意味が含まれている。

結婚しようとしている男女や彼らの家族にとってこのことの重要性に対する意識はどの国どの民族でも同じだろうが、ウイグル社会においてはその当事者にとどまらず、彼らが住む町や村あるいは職場の人びとにとってもまた重要なイベントであり、地域の祭りにも相当するものである。

ウイグル語で「結婚」は「トイ」(toy)と呼称する。この呼称は結婚だけではなく、出産お祝い式 (boshuk toy)、割礼式 (sunnat toy)、日本の還暦祝に相当する60歳記念式、学校や会社などの設

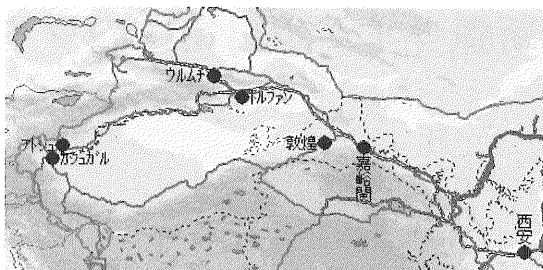
立周年式(例えば、特定の学校の toy), 大学に合格した人やその地方に代表として何らかの賞をもらった人の為に行うお祝い式など、様々な分野で「トイ」という言葉を使う。これらのいずれも町や村の人々や学校や会社の職員や生徒など大勢の人びとが参加するイベントであり、その内容も参加者の希望に応じなければならない。

ウイグル人の間では、仕事など様々な理由で故郷から離れて暮らしている人が結婚する場合も、必ず自分の故郷で結婚式あげる習慣がある。もし結婚相手と故郷が異なったり、仕事の都合が悪いなどの理由から、異郷で結婚した場合にも、必ず一度は自分の都合のつく時に故郷に戻り、生まれた町や村の人びとのためにもう一度式をあげる。逆に故郷で結婚式をあげた人は、職場に戻ったとき、職場の同僚や友人のためにもう一度式をあげる。

このようにウイグル人社会において、結婚式に一番影響を与えるのは、結婚する当人の意識ではなく、彼らをとりまく人びとの意識である。この観点に基づいて、本稿では、新疆ウイグル自治区の南に位置する町アトシュに住むウイグル人家族三世代の結婚式を事例に取りあげ、2004年9月に現地で行った家族へのインタビューと筆者がそこで観察した結婚式の模様からその三世代の結婚式の模様を再構成して記述し、ウイグル人の結婚式の時代による変化とその要因を考察したい。

## I. 調査地と調査対象の概況

調査地である新疆ウイグル自治区アトシュ市の南西部のウスチュンアトシュ(中国語:上阿図什郷)は、アトシュ市の中心部から約35キロ、また新疆の大都市の一つカシュガル市の中心部から約25キロの地点に位置する、中国のキルギス国境に近い町である。人口は39,699人で、8,808世帯が暮らしている。住民のほとんどがウイグル族で、農業を中心に、林・牧畜業を付加業にして暮らしている。この他の自営業者数は202人、国家公務員1,628人。一人当たりの平均年収1301.95元(約17,000円)である。小中高等学校数は合わせて25



あり、その学生数は10,278人である。土地面積は76,000ヘクタールで、そのうち農業に利用できる面積は47,000ヘクタール、一人当たりについて1.1ヘクタールになる<sup>1</sup>。この地域は1886年に設立されたウイグル族初の現代式学校(非宗教)の地域にあたり、その影響でウイグル人が暮らす全地域に現代教育が普及した、ウイグル人の間で有名な地域でもある。

本論で事例としてとりあげるのは、そのウスチュンアトシュの町役場がある中心地から3キロ離れたオチャという村での結婚式の模様だが、ここでの生活状況はここ二、三十年の間に大きく変化している。この村は筆者の父の実家があるところで、筆者が幼い頃に夏休みになるといつも祖父の家に行くのが楽しみだった。当時カシュガル市からこの村にはバスなどは通っていなかった。毎週日曜日になると農民たちは農産物や家畜をカシュガル市の市場で売るために、ロバ車あるいは30キロの距離を歩き、売り物の全てを売った後、自らの家族に必要なものを買って夜にまた戻るのが一般的なことだった。カシュガル市に住む人々はここに来るためには自転車を使うか、あるいは道路沿いに出て長い時間まって数少ない荷物を運ぶトラックに頼んで村の近くまで乗せていってもらった。道路の質も悪く、田舎に着くまで服や体に泥がいっぱいになっていた。現在では道路は全てアスファルトで、自営業のバスが運賃5元で一日何回も往復している。また、10元出すとタクシーで1時間もしないうちにこの村まで着くことができる。

また以前は電気もなく、夜になると大人が家にこもったり、若者は村中の橋に集まって世間話をしたりしていた。テレビ、ラジオ、テープレコーダなどもなく、思い出すのは電線につなげたスピ

ーカーから流れてくる地元放送センターの宣伝や音楽だった。筆者が中学の頃（1980年代後半）までにはほとんどの家庭に電気が引かれたが、電力が弱いと停電が一日何回も起こる時代だった。経済力がある家庭では白黒テレビもあったが、それは数少なかった。村の人々は夜になるとテレビがある家に集まり、そこでテレビ番組を楽しんでいた。当時テレビチャンネルは一つで、毎日の夜5時から10時までの放送であり、番組ほとんどウイグル語だった。現在ではほとんどの家庭にカラーテレビ、ビデオ、テープレコーダ、VCD、冷蔵庫などがそろっている。農業機械の普及も進めており、自分らの農業機械を持っている人も少なくない。

かつてこの村には商店などがなかった。肉、お茶、塩、砂糖などをかうために町役場近くの店（祖父の家から約10キロ）まで歩いていくか、ロバに乗って行っていた。急に要り用なときには近所の家からもらってくることもあった。町役場の商店街での商品も日用品や農業道具だけで、本、自転車、服、アクセサリなどを買うためにはカシュガル市まで出なければならなかった。町役場脇の商店街は平日は非常に静かで、毎週月曜日になると町のバザールが開催され、農産物が売買された。今では祖父の村にも家を改造した商店が何軒か見られる。これらの商店ではシャンプー、タバコ、切手、玩具などをはじめ様々な日用品が並べられており、必要な物を一日24時間いつでも買うことができる。一方、町の商店街は昔よりもっとにぎやかになり、自営業の映画館、ネットカフェ、ビデオショップやレンタル屋、ゲームセンターなど以前なかったものも見られる。月曜日のバザールは今では日曜日になり、以前同様にぎわっている。本、自転車、服、アクセサリなどはそこで買うことができるが、テレビ、冷蔵庫など家電製品は今でもカシュガル市から買っている。

筆者が子供の頃は都会の人と田舎の人で服装が違っていた。田舎の人は伝統服が多く、男の子は必ず帽子、女性はスカーフをかぶるのが一般的で、Tシャツ姿で歩くと村の人々は珍しいものでも見

たかのように見つめる時代だった。帽子をかぶっていなかった筆者が「あなたはウイグル人じゃない、よその民族だ」と言われて遊んでももらえなかったりすることもあった。今では田舎の若者と都会の若者の服装はあまり変わらない。都会の人はもちろん、外国の観光客を見てもあまり気にしない。これ以外にも、教育制度、医療、地域交流など様々な分野が以前よりも充実し、人々の暮らしも豊かになっている。

本論で結婚式の事例として取り上げるのはオチャ村に住む男性A1、彼の息子（長男）B2、そして孫娘C2の家族三世代の結婚式である。彼らの家庭状況を略述すると次のようになる。

A1：男子、1926年7月（推定）生まれ、取材した時の年齢は78歳。生まれてから今までウスチュンアトシュで暮らし、小麦とコーリャン栽培を中心とした農業、また庭の一部を利用した果樹や野菜の栽培・加工、羊や牛、鶏などの動物飼育と、その加工製品をカシュガルや当地のバザールで販売して得た収入で生活してきた。最近では体が弱ったため家業を長男に譲り、熱心なイスラム教徒としてモスクに通いながら老後の生活を過ごしている。1949年に今の妻A2（取材の時67歳）と結婚して8男2女の子供をもうけた。子供達の状況は以下のとおりである。

長女B1：50歳、既婚、ウスチュンアトシュに住む。子供6人。

長男B2：49歳（後述）

次男B3：43歳、既婚、アトシュ市に住む。子供5人。

三男B4：41歳、既婚、ウスチュンアトシュに住む。子供3人。

四男B5：39歳、既婚、カシュガル市に住む。子供2人。

五男B6：37歳、既婚、ウスチュンアトシュに住む。子供5人。

六男B7：35歳、既婚、ウスチュンアトシュに住む。子供2人

七男B8：33歳、既婚、ウスチュンアトシュに住

む, 子供3人

次女B9:31歳, 既婚, ウスチュンアトシュに住む, 子供2人

八男B10:29歳, 既婚, ウスチュンアトシュに住む, 子供1人

B2:49歳, 既婚, 父と一緒に住む。子供5人, 孫1人。学歴は中学まで, 生まれてから今までウスチュンアトシュで暮らし, 父の下で農業に従事してきた。現在は父を継いで, 一家の農業の中心として働きながら家族の面倒を見ている。彼は1回の離婚を経験したが, その理由はどうやら子供が出来なかったためらしい。1975年に今の妻B11(取材した時の年齢は47歳)と結婚し2男3女の子供をもうけた。子供達の状況は以下のとおりである:

長男C1:28歳。既婚, ウルムチに住む。子供一人

長女C2:22歳(後述)

次女C3:20歳。未婚, 大学4年生, カシュガル市に住む。

三女C4:18歳, 未婚, 大学1年生。カシュカル市に住む。

次男C5:16歳, 未婚, 高校2年生。叔父や父と一緒に住む。

C2:22歳。2004年春に夫C6と結婚して, 両親の家から1キロ離れた所に住む夫の両親と暮らしている。彼らは農業以外に夫が経営するウスチュンアトシュとカシュガル市の間で運行する自営業ミニバスの利益から得た収入で生活している。

## II. 家族三世代の結婚

### 1. A1(第一世代)の結婚

彼が23歳の時, 両親や近所や親戚などの紹介で村の何人かの娘を嫁候補として打診し, 最終的に今の妻(当時12歳)と結婚することが決められた。両側の使者の交渉で1949年の12月のある日を結婚日と決めた。妻の話によると当時12歳の彼女はあ

まりにも若いため結婚ということも知らず, 誰かの家の子供になると知らされた。結婚の様々なやりとりももっぱら大人たちの間だけで行われた。

当時, 彼の父はすでに亡くなっており, 家にもお金がないため, 父から残された土地100平米を売って得た400キロの小麦の一部を結婚のために使った。この時代は特に農村の売買においては金銭よりも小麦の授受が中心で, それをお金にするためにはカシュガル市にいかねばならなかった。当時カシュガルへの交通が不便だったため, 結婚資金の全ては小麦で済ませたと言う。

結婚資金の使い方は次のとおりである。まず花嫁側に婚資(toyluq)として40キロの小麦を与えた。花嫁はこれを使って服, アクセサリー, 布団, 布などを買った。結婚の宴会に訪れるお客の為に10キロの小麦と交換に羊一匹を手に入れて, 結婚式用の料理に使った。彼らの話によると当時の結婚は今より簡単で, そんなに費用がかからなかったという。様々なイベントにかかる費用にしても, 料理の材料にしても, 親戚, 隣人などの援助で行われ, 結婚する当人にはあまりにも負担がかからなかった。

結婚の手順としてはまず, 双方の親戚の間での交渉で, 結婚することや結婚式の日どりが決められた。当時は結婚招待状を書く習慣がなく, 結婚式の前日にモスクを通じて村の人々に結婚式のことが知らされた。

この地域では結婚式前日の夜(イスラム教の一日五回の祈りの最後のものが終わった後, 夜の7~8時頃)から約6時間にわたって, 新郎の家で行われるミヘマンハナケズテズ(mihmana kezetish, 新郎の家を盛り上げさせるという意味)という習俗があるため, 新郎の友人, 親戚, 近所などの若者中心に約60人が彼の家に集まった。この中で, 楽器の演奏ができる3人が自分の楽器を持って来ていた。ひとりらはラワブ(rawap, 一種の六弦弦楽器), もうひとりらはドットル(duttar, 一種の二弦楽器), さらにもうひとりらはダップ(一種の打楽器)を持って来た。この3人がこれから行われる催しの音楽担当者となった。また, 催しが始ま

る前に、参加者の指名によって催しの司会 (yeget beshi) 一人、警備 (marwaz) 3 人が選ばれた。

選ばれた司会は参列者からよく見える場所に座った。警備の 3 人は会場の 3 ヶ所に立った。その後、司会が口をきって催しが始まった。この催しは一般に新郎の家の庭で行われる。催しの内容は、まず音楽から始められ、皆が音楽に合わせて踊る。連続的にいくつかの曲が終わった後、参加者の誰かが誰かの犯した罪を司会に訴えに来る。例えば、

訴え人「司会さん、一つ訴えることがある、聞いてください」

司会「何か、言ってくれ」

訴え人「この間、〇〇が年寄りの前を通った時に挨拶をしなかった、これを訴えるべきかどうかわからなくて…」

司会「もちろん、これは大変失礼なことだ、警備員！すぐ、〇〇の足に土を踏まさないで、連れてきてくれ！」

警備「はい、司会さん」

(〇〇が連れてこられた後)

司会「〇〇、訴え人の言うことは本当なのか」

〇〇「すみません、その時忙しいので、忘れてしまいました。これから気をつけます」

司会「皆さん、我々の村では年寄りに失礼なことするのは絶対許されません、彼も皆さんもこれからこのよう罪を起こさないようにするため、罰として彼の写真を壁に描いておきましょう」

(その後、警備員が彼の上の服を脱がせて、腕をひろげて全身で壁に貼りつくようにさせてから、バケツで水をもって来て後ろから浴びせかけると、彼の身体の部分だけが濡れないうで残り、彼の姿が壁に写ることになる)。

このようにして、音楽とゲームが繰り返し行われた。途中、10キロの小麦と交換で手に入れた羊が殺され、肉が会場の人数に合わせて切られ、大きい鍋で何時間もかけて煮られて参列者に配られた。残ったスープを使ってヤーマ (yama) と呼

ばれる料理が作られ、皆で食べた。催しは朝 2 時まで行われた。

このとき新郎であった彼の話によると、歌は音楽担当者だけではなく、参加者の中の歌が上手い人や歌いたい人がリクエストすれば、誰でも歌うことができたという。歌はほとんどウイグル民謡で、誰でもよく知っている歌のようだ。音楽演奏者に謝金を与えたかを尋ねたところ、当時音楽演奏者の間でそういう契約はなく、途中で皆が盛り上がった時に参列者が、踊っている人の頭の上でお金を 3 回廻してから演奏者の前に置いていく習慣があり、そうして集まったお金を演奏者 3 人で分けたということだった。

催し会場では女性と男性、年寄りと若者は座る場所が分けられ、罰を受けないように参列者はきちんとそのルールを守る。

その次の日に結婚式が行われた。早朝に村の男性達は朝の集会でのお祈りが終わった後 (だいたい 7 時ごろ) 次々に新郎の家に訪れ、家の中や庭に用意された席につく。ひとつのテーブルに 4 つの椅子が配された席が埋まると、4 人の客の前に 5 つのナンが置かれ、2 人に一つの茶碗のヤーマと呼ばれる料理が出される。客はまずナンの一つを 4 人で分けてヤーマと一緒に食べる。そのあと各自にミカンくらいの大きさの茹でた羊肉が配られ、ナンを 1 枚ずつと受け取る。イマム (宗教指導者) やコーランをよく知っている人 (一般に目上の人) が祈りをした後、皆が祝福を祈ってから退場する。こうしたもてなしと祈りが、訪れる客の人数や時間に合わせて、朝 10 時頃まで繰り返行われた。家の場所が足りない時には近所の家を借りた。また客が訪れる最中、新郎の家の前で楽器演奏者の為に特別の場所が用意され、客が少なくなるまで演奏したり歌ったりした。演奏者や楽器は前の日と同じだった。当時花嫁であった妻に「この時点で新婦の家庭で何か儀式行われましたか」と尋ねたが、何の儀式も行われていないとのことだった。

来客が途絶えると、村の若者や新郎の親戚が残って後片付けをし、次の儀式的準備にとりかかる。

アクセサリーなどが別の馬車に乗せて運ばれた。

このB2の1度目の結婚式のときには、結婚式の次の日にユズアチク (yuz-aqku, 嫁の顔を開ける) という式が行われた。この式では朝10時頃に新郎新婦の女性親族や友人が新郎の家に集まった。新婦も前日と同じ服を着て皆の中に入って座った。皆で新郎側の用意した料理を食べた後、新郎の妹が出て来て音楽に合わせて一段踊った後、新婦のかぶっているスカーフを取って、全ての人に新婦の顔が見えるようにした。このスカーフは新郎の妹がもらった。これが終わった後、新婦側の客が先に自ら用意した礼品を、新郎の親戚の一人一人の名前を呼んで渡した。その後、新郎側からも新婦側の親戚や参加者に対して同じように礼品を渡し、さらにお祝いの祈りをして式が終わった。礼品はほとんど布で。その量も質も親戚関係、年齢、結婚式での役割などによって異なっていたと言う。

### 3. C2 (第三世代) の結婚

彼女が結婚したのは筆者が聞き取りした時から半年前 (2004年3月11日) のことだった。結婚相手は隣の村に住む自営業ミニバス経営者C6 (26歳) で、彼とは1年前から付き合っていた。皆がわかるような付き合いはこの村でいまだに恥ずかしいことであり、彼らは付き合っていることを親しい友達以外の誰にも教えず、秘密で会ったり、カシュガル市までデートしたり、困ったときには助け合ったりして、ようやく結婚することを決めた。彼がプロポーズしたのはカシュガル市でデートしている最中で、彼女はプロポーズをその場で受けたと言う。彼女の承認を得たその日に彼はカシュガル市の一番にぎやかなバザールに連れて行き、記念として指輪と一着の服を買ってあげた。

その後二人は結婚のことを家族に知らせた。彼らの家族は以前からお互いによく知っていたため、両親もそんなに反対しなかった。両親の承認が得られたことをお互いに伝えあった後、彼の両親がエルチェ (使者) を派遣する時期を彼女に相談した。彼女も両親の都合を確かめてエルチェの訪れ

る日時が決められた。2004年2月8日の昼ごろに男性側から父、叔父、両家族と親しい付き合いのある父の3人の友人のあわせて5人がお祝いを持って彼女の家を訪ねた。彼女の両親も男性親戚や友人の何人かをその日の為に家に招待した。客が揃った後、彼女の両親が用意した様々な料理が出され、食事の為に祈りして出された物が片付いた後、男性達がひと部屋に集まった。この時点で、彼の父が彼女の父に対して話し始めた。「今日、伺った理由は、おたくの娘C2を我が息子C6の妻として、また自分の娘としてこれから面倒を見るつもりです、いかがでしょうか…。」彼女の父は「おたくにうちの子供をもらっていただくことを遠慮することはございません、いつでも受けとってください。」と決まり文句で答え、結婚を承認する気持ちを表明した。その後、婚資、結婚資金のやり取り、婚資を持ってくる時期、結婚日などの交渉が行われ、合意が得られた後、男性側から彼女の家族一人一人に名前を挙げて礼品が手渡された。次に、女性側からも客に一人ずつ礼品が配られ、式が終わった。

この時の交渉を通じて、婚資として7,000元 (約100,000円) を嫁側に渡すこと、このお金の全てを新婦の為に使うこと、結婚式に使うものとして料理のための牛一匹、野菜や香辛料など、また招待状、ハンカチなどを新郎側からさらに提供すること、楽器演奏者の謝金も新郎側が払うこと、新婦の結婚ドレスのレンタル料金を新郎側が出すこと、新郎が結婚日に着るスーツ、シャツ、ネクタイ、靴などを新婦側から用意すること等が決められた。

次に、交渉で決められたとおり2月20日にチョウンチャイ (chong chay) 式が行われた。この式では新郎側から新郎の母を含む親戚や友人から構成された25人が新婦の家を訪れた。客は新婦側から用意された様々な料理、果物、お菓子などでもてなされた後、新郎の母が交渉で決められた婚資と新婦の家族の一人一人に対しての礼品などを、大声で紹介し皆に見せながら新婦側に渡した。新婦側からは新郎が結婚式で着る服や、新婦の家族

アクセサリーなどが別の馬車に乗せて運ばれた。

このB2の1度目の結婚式のときには、結婚式の次の日にユズアチク (yuz-aqku, 嫁の顔を開ける) という式が行われた。この式では朝10時頃に新郎新婦の女性親族や友人が新郎の家に集まった。新婦も前日と同じ服を着て皆の中に入って座った。皆で新郎側の用意した料理を食べた後、新郎の妹が出て来て音楽に合わせて一段踊った後、新婦のかぶっているスカーフを取って、全ての人に新婦の顔が見えるようにした。このスカーフは新郎の妹がもらった。これが終わった後、新婦側の客が先に自ら用意した礼品を、新郎の親戚の一人一人の名前を呼んで渡した。その後、新郎側からも新婦側の親戚や参加者に対して同じように礼品を渡し、さらにお祝いの祈りをして式が終わった。礼品はほとんど布で。その量も質も親戚関係、年齢、結婚式での役割などによって異なっていたと言う。

### 3. C2 (第三世代) の結婚

彼女が結婚したのは筆者が聞き取りした時から半年前 (2004年3月11日) のことだった。結婚相手は隣の村に住む自営業ミニバス経営者C6 (26歳) で、彼とは1年前から付き合っていた。皆がわかるような付き合いはこの村でいまだに恥ずかしいことであり、彼らは付き合っていることを親しい友達以外の誰にも教えず、秘密で会ったり、カシュガル市までデートしたり、困ったときには助け合ったりして、ようやく結婚することを決めた。彼がプロポーズしたのはカシュガル市でデートしている最中で、彼女はプロポーズをその場で受けたと言う。彼女の承認を得たその日に彼はカシュガル市の一番にぎやかなバザールに連れて行き、記念として指輪と一着の服を買ってあげた。

その後二人は結婚のことを家族に知らせた。彼らの家族は以前からお互いによく知っていたため、両親もそんなに反対しなかった。両親の承認が得られたことをお互いに伝えあった後、彼の両親がエルチェ (使者) を派遣する時期を彼女に相談した。彼女も両親の都合を確かめてエルチェの訪れ

る日時が決められた。2004年2月8日の昼ごろに男性側から父、叔父、両家族と親しい付き合いのある父の3人の友人のあわせて5人がお祝いを持って彼女の家を訪ねた。彼女の両親も男性親戚や友人の何人かをその日の為に家に招待した。客が揃った後、彼女の両親が用意した様々な料理が出され、食事の為に祈りして出された物が片付いた後、男性達がひと部屋に集まった。この時点で、彼の父が彼女の父に対して話し始めた。「今日、同った理由は、おたくの娘C2を我が息子C6の妻として、また自分の娘としてこれから面倒を見るつもりです、いかがでしょうか…。」彼女の父は「おたくにうちの子供をもらっていただくことを遠慮することはございません、いつでも受けとってください。」と決まり文句で答え、結婚を承認する気持ちを表明した。その後、婚資、結婚資金のやり取り、婚資を持ってくる時期、結婚日などの交渉が行われ、合意が得られた後、男性側から彼女の家族一人一人に名前を挙げて礼品が手渡された。次に、女性側からも客に一人ずつ礼品が配られ、式が終わった。

この時の交渉を通じて、婚資として7,000元 (約100,000円) を嫁側に渡すこと、このお金の全てを新婦の為に使うこと、結婚式に使うものとして料理のための牛一匹、野菜や香辛料など、また招待状、ハンカチなどを新郎側からさらに提供すること、楽器演奏者の謝金も新郎側が払うこと、新婦の結婚ドレスのレンタル料金を新郎側が出すこと、新郎が結婚日に着るスーツ、シャツ、ネクタイ、靴などを新婦側から用意すること等が決められた。

次に、交渉で決められたとおり2月20日にチョウンチャイ (chong chay) 式が行われた。この式では新郎側から新郎の母を含む親戚や友人から構成された25人が新婦の家を訪れた。客は新婦側から用意された様々な料理、果物、お菓子などでもてなされた後、新郎の母が交渉で決められた婚資と新婦の家族の一人一人に対しての礼品などを、大声で紹介し皆に見せながら新婦側に渡した。新婦側からは新郎が結婚式で着る服や、新婦の家族

婦の部屋の隣の部屋で泊まった。

## 2. B2 (第二世代) の結婚

彼の今の妻は1975年に結婚した2度目の嫁である。当時この村では2度目の結婚は簡単に行う習慣があったため、4人の宗教指導者を家に呼んでニカだけ行い、式は家族だけで簡単に終わらせて一緒に暮らすことになった。そのため、ここでは彼の一回目の結婚式の様子を紹介する。

初めての結婚は両側の両親の交渉で成立したらしい。彼の話によると結婚式の数週間前に農地に行く途中、両親が田んぼで働いている一人の女性を指して「あの女がお前の妻になる者だ」と教えたようだ。これが結婚のことも彼女の顔も知らされた最初である。当時この様な伝え方は一般的なものであったという。

結婚式は1971年の夏のある日に行うことが、エルチェ(使者)や双方の両親の交渉を通じて決定された。トイロック(婚資)として300元(当時50キロの小麦に相当)と、嫁のために新しく作る服の材料として13着相当の布が新婦側に送られた。当時の中国で工業品は全国的に不足しており、結婚の申し込みをするとチケットが与えられるので、それを使って手に入れたらしい。これらの資金の全ては父が工面した。

この時代もまだ招待状を送る習慣はなく、村の人々にはモスクを通じて、近所の村に住む親戚や友人に対しては親戚の子供が派遣され、家々走り回る形で、また遠方(県外)に住む人々には伝言を送る形で結婚式のことが伝えられた。

この時代には結婚式の2日前に新郎の友人が集まり、山へ行って料理の火に使う乾いた木をとって来るがあった。その最中、楽器演奏者は誰を呼ぶか、客の手洗い水を誰が出すのか、客に料理を誰が配るか、お酒を誰が用意するのかなど、若者の間で具体的な役割分担が決められたという。

このときもミヘマンハナケズテスを行う習慣がまだ続いていた。結婚日の前日の昼ごろ、新婦側から7人の男性(新婦の父を含む)が新郎の家を訪れた。男性のみで構成された親しい友達や親戚

が集まった後、新郎の父がコーランの一節を唱え、皆がお祈りして、結婚式のために用意された雄羊を父親が「神は偉大だ」(allahu akbar)と言いながら首から切って殺した。殺した羊は肉、皮、内臓などに分けて、肉はその日の夜にやってくると思われる人数に合わせて切り大鍋に入れて、山から取って来た乾いた木を燃やし茹で始めた。

父のときと同じように結婚の前日の夜に村の人々を中心にしてイベントが始まった。式次第はほぼ同じであり、以下に相違点のみ記す。

まず人数は1000人以上で、自分の村に限らず近所の村やかなり離れた所からも客らが訪れた。次に楽器演奏者も、友達の紹介でカシュガル市からも呼ばれた。演奏した楽器はバイオリン、ネイ(Nay, 笛)、ダップ(Dap)、ラワップ(rawap)ドットタル(duttar)である。歌った曲もこの地方の民謡だけではなく、カシュガル民謡やその時のやり歌も歌われた。演奏の謝金は以前と同じように現場で集まったお金だったが、演奏者の前に物を出すことはなくなったという。また、父の時代にはゲームで罰を受ける人は参加者の誰でも可能であったが、子の結婚式では親戚と友達だけで限られた。罰として払うのは体罰ではなく、自分で用意したお祝い品だった。出された物は全部新郎側がもらったようで、彼は羊8~10頭ももらったと語った。さらに当時は若い男性達が客の集まる前に新郎の家で年寄りから隠れてお酒を飲んだり、トランプを使ってギャンブルをやったりすることがあった。また、客に出した料理は祝い料理のヤーマだけではなく、肉スープ、若者には酒のつまみとして野菜炒めなども出された。

次の日行われた結婚式も父の時代と変わらないが、彼の場合には新婦を向かえに行くとき楽器演奏者が同行し、歌に合わせて演奏してくれた。新郎新婦の着た服は全部新しい服だった。新郎は新婦側から用意されたスーツとコートを着、頭にはウイグルの伝統帽子ドッパ(doppa)をかぶった。新婦は新しいスーツ(女性用)や皮靴の上から、体を全体に覆うロマル(romal, スカーフ)をかぶって馬に乗せられた。また、新婦の服、布団、



そして午後2時に、新郎の家に集まった30人以上の若者（男性）が新郎と一緒に花嫁の家に向かって出発した。家から出たとたん皆の大騒ぎがはじまり、花嫁に家に着くまで、町を歩きながら歌ったり、自分たちで詩を作って語り、時には皆で新郎を持ち上げて飛ばしたりした。当時の歌はどんな歌なのか尋ねたところ、その内容は嫁を責める汚い言葉が多いため、歌ってくれなかった。

大騒ぎしながら新婦の家に近づくと、その周辺に住む若者が出てきて赤い布で前進を阻止する、この時に新郎側が彼らに向かってハンカチを掲げると、彼らは道をゆずり赤い布をお祝いとして新郎の腰に締める。このようなことが新婦の家に着くまで3回ほど行われた。また、新婦の家に入る時にも庭のドアが閉められ、そのドアを閉めた人に、羊肉を赤い布にくるんだものをあげるとドアを開いてくれる。

家に入った後、人びとはまず大騒ぎする。次に、新郎一行は新婦の家から用意された別の建物に案内され、そこで新郎の父親を含む男性親戚や友人やイマム等が集まるのを待つ。皆が集まると、男性と女性が二つの建物に分かれて座った。そこで新婦の家族に用意された料理を食べた後、イマムの司会でニカがはじまった。

「ニカ」はイスラム教を信仰する全ての男女が必ずしなければならない儀式であり、それをしないで男女が同居することは許されない。結婚式を挙げる条件が整っていない場合は、ニカだけ行って一緒に住む男女もいる。

ニカは一般的に結婚式の日の朝に宗教指導者の司会で嫁の家で行われる。この時、新郎側から新郎の父、友人、親戚など男性から構成されたメンバーが、また新婦側から新婦の家族、友人（女性）、親戚などが新婦の家に集まり、男女は別々の部屋に分かれて待機する。皆が朝食を食べた後、宗教指導者が結婚ということのイスラム教での教え、結婚した人のムスリムとしてやるべきこと、禁じられたことなどに関して講義を行う。この後、お祈りをし、宗教指導者が新郎に対して「○○君、あなたは○○の娘○○を自分の妻として認めます

か」と聞く。新郎は「認めます」と答える。次に新婦に対して「○○さん、あなたは○○の息子○○を自分の夫として受け入れますか」と聞く。ウイグル人の女性はこれに早く答えるのは恥ずかしいと考え、同じ質問を3回繰り返した後、「受けられます」と答える。宗教指導者が彼らは夫婦であることを宣言した後、皆で「おめでとうございます」と言って式が終わる。家から出る時に若者たちは「アララ…」と叫びながら皆で新郎をかかえ上げ、投げ飛ばしたりして大騒ぎする。

ニカが終わった後、新郎は町の若者と一緒に大騒ぎしながら歩いて自分の家に戻った。一方、新婦は泣きながら家族らと別れた。当時12歳だった彼女は怖くなって、精一杯泣いたという。新婦の衣装については、当時は皆が貧しかったため、結婚式で新しい服を着ることは少なかった。彼女の話によると、その日は普段着ていた服を着て、その上に頭から足までチェメン（この布は現在では使われていない）と呼ばれる布をかぶって着たという。

新婦が家族と分かれてから、彼女は新婦側に用意された、頭に赤い布をかぶった馬に乗せられて新郎の家に向かった。乗馬したのは新婦と新婦の叔父だった。馬の持ち主が馬を引っ張りながら出発した。新郎の家に着くまで町のやんちゃな若者や子供たちは新婦が乗った馬の周りで歌ったり、詩を語ったりした。新郎の家に着くと新郎が出てきて、新婦を馬から受け取り、手と腰の間に挟んで二人がこれから住む家に運んだ。

ウイグル人の間では、結婚式の当日に新婦に付き添う役のイエングを任命する習慣がある。イエングは新婦の家族から選ばれる。一般的に新婦の叔母や叔父の妻など結婚経験ある女性が務める。彼女らは新婦に対して結婚当日に当面の色々なことを教えたり、新郎の家まで付き添って、男女の交渉が上手く行かない場合に新婦を説得したりする。オボル・マンスルの結婚でも3人のイエングが任命された。一人は新婦の叔父の妻、もう一人は近所の奥さん、もう一人は母方の叔母だった。この3人は結婚の日に新婦と一緒に来て、新郎新

る前に、参加者の指名によって催しの司会 (yeget beshi) 一人、警備 (marwaz) 3 人が選ばれた。

選ばれた司会は参列者からよく見える場所に座った。警備の3人は会場の3ヶ所に立った。その後、司会が口をきって催しが始まった。この催しは一般に新郎の家の庭で行われる。催しの内容は、まず音楽から始められ、皆が音楽に合わせて踊る。連続的にいくつかの曲が終わった後、参加者の誰かが誰かの犯した罪を司会に訴えに来る。例えば、

訴え人「司会さん、一つ訴えることがある、聞いてください」

司会「何か、言ってくれ」

訴え人「この間、〇〇が年寄りの前を通った時に挨拶をしなかった、これを訴えるべきかどうかわからなくて…」

司会「もちろん、これは大変失礼なことだ、警備員！すぐ、〇〇の足に土を踏まさないで、連れてきてくれ！」

警備「はい、司会さん」

(〇〇が連れてこられた後)

司会「〇〇、訴え人の言うことは本当なのか」

〇〇「すみません、その時忙しいので、忘れてしまいました。これから気をつけます」

司会「皆さん、我々の村では年寄りに失礼なことするのは絶対許されません、彼も皆さんもこれからこのよう罪を起こさないようにするため、罰として彼の写真を壁に描いておきましょう」

(その後、警備員が彼の上の服を脱がせて、腕をひろげて全身で壁に貼りつくようにさせてから、バケツで水をもって来て後ろから浴びせかけると、彼の身体の部分だけが濡れないで残り、彼の姿が壁に写ることになる)。

このようにして、音楽とゲームが繰り返し行われた。途中、10キロの小麦と交換で手に入れた羊が殺され、肉が会場の人数に合わせて切られ、大きい鍋で何時間もかけて煮られて参列者に配られた。残ったスープを使ってヤーマ (yama) と呼

ばれる料理が作られ、皆で食べた。催しは朝2時まで行われた。

このとき新郎であった彼の話によると、歌は音楽担当者だけではなく、参加者の中の歌が上手い人や歌いたい人がリクエストすれば、誰でも歌うことができたという。歌はほとんどウイグル民謡で、誰でもよく知っている歌のようだ。音楽演奏者に謝金を与えたかを尋ねたところ、当時音楽演奏者の間でそういう契約はなく、途中で皆が盛り上がった時に参列者が、踊っている人の頭の上でお金を3回廻してから演奏者の前に置いていく習慣があり、そうして集まったお金を演奏者3人で分けたということだった。

催し会場では女性と男性、年寄りと若者は座る場所が分けられ、罰を受けないように参列者はきちんとそのルールを守る。

その次の日に結婚式が行われた。早朝に村の男性達は朝の集会でのお祈りが終わった後(だいたい7時ごろ)次々に新郎の家に訪れ、家の中や庭に用意された席につく。ひとつのテーブルに4つの椅子が配された席が埋まると、4人の客の前に5つのナンが置かれ、2人に一つの茶碗のヤーマと呼ばれる料理が出される。客はまずナンの一つを4人で分けてヤーマと一緒に食べる。そのあと各自にミカンくらいの大きさの茹でた羊肉が配られ、ナンを1枚ずつと受け取る。イمام(宗教指導者)やコーランをよく知っている人(一般に目上の人)が祈りをした後、皆が祝福を祈ってから退場する。こうしたもてなしと祈りが、訪れる客の人数や時間に合わせて、朝10時頃まで繰り返し行われた。家の場所が足りない時には近所の家を借りた。また客が訪れる最中、新郎の家の前で楽器演奏者の為に特別の場所が用意され、客が少なくなるまで演奏したり歌ったりした。演奏者や楽器は前の日と同じだった。当時花嫁であった妻に「この時点で新婦の家庭で何か儀式行われましたか」と尋ねたが、何の儀式も行われていないとのことだった。

来客が途絶えると、村の若者や新郎の親戚が残って後片付けをし、次の儀式的準備にとりかかる。

への礼品、また客全員にプレゼントが渡されて式が終わった。

3月4日に二人は一緒に写真館へ行って写真を撮り、公社（町役場相当）の民政局を訪ねて結婚登録をし、結婚証をもらった。これで法律上二人が夫婦であることが承認された。その後、招待状を作る専門店に行き、招待状の印刷を注文した。現在若者と大人が配る招待状はデザイン的に異なり、その質によって値段も異なる。この招待状は書道風のウイグル文字で書かれ、内容も単なる招待ではなく、結婚をお祝いする流行の詩も加えられた。彼らは自分らの友人たちを招待するために一枚5角（0.5元）の招待状を60枚注文し、新婦には25枚渡された。一方大人の招待状は非常に簡素なもので、色は赤だが文字は書道風ではなく出版用の文字で、紙も薄い紙だった。彼らの用意したのは100枚10元の招待状1500枚で、この内の700枚は新婦側に渡された。招待状は結婚式の5日前に招待客に送った。

あわせて結婚式の準備が始まった。結婚式の一週間前の夜に、新郎の親しい友達が新郎の予約したレストランに集まり、結婚式の様々な手配、ビデオ撮影者、音楽演奏者、車探し、新郎の付き添い、招待状を配る役などいろいろと手のかかる作業の役割分担が決められた。さらに参加者は自らのお祝い金をそれぞれ出した。そのあとは皆で食事したり、お酒を飲んだり、レストラン提供の音楽に合わせて踊ったりして楽しんだ後解散した。次の日から皆は分担した役に従って動き始めた。

結婚式の手順は祖父や父の時代と変わりはないが、イベントの内容や構成にはかなりの変化があった。変化した点は以下の通りである。

まず、父の時代まで結婚式の前日の昼ごろに行われていた羊を殺す式（chay elipberix）は、新郎側ではなく新婦の家で行われた。この式では新郎側から代表者（新郎の兄）が選ばれ、新郎側で用意した牛一頭、料理の材料、香辛料、砂糖、お茶、ナン200枚などを持って、肉職人（kassap）を連れて新婦の家を訪れた。新婦の父がお祈りを行い、肉職人が牛を殺して、肉、皮、内臓などに分けた

後、肉の3分の1を新婦側に残して、残りの部分新郎側に持って帰ることになった。

次に、結婚式の前の日の夜にミヘマンハナケズ式が行われたが、参加者は村の中や近在の村に住む招待された人々だけに留まった。新婦側からこの式に参加する習慣は従来もないため、新婦の親戚は式に参加しなかった。

この式は夜7時頃にはじまったが、罰を受けるゲームは取りやめられた。その理由を尋ねたところ、今の時代は司会をうまくやってくれる人が見つけにくくなり、司会者の罰に素直に従う人もなくなったため、ゲームがつまらなくなり、ここ数年次第に行われなくなりつつあるという。そのため式の唯一の楽しみは専門楽団の音楽に合わせて踊ることだった。演奏者は2日間の日程で200円で雇われた、地元の若者で構成されたアマチュアバンドだった。基本的には電子ピアノを大きいスピーカーにつなげ、マイクが用意され、式場（新郎家）の決められた場所で演奏する。演奏される曲や歌われる歌は民謡や現代流行しているウイグルポップス等だった。演奏の合間にはテープでディスコ音楽も流すという。バンドは自分たちの面子を保つために、歌う人をバンドの人だけに限って、他の人が歌うのを断った。演奏者の前にお金を出す習慣はいぜんとして見られたが、集めたお金は演奏者がもらうのではなく新郎が受け取り、その中から演奏者への200元の謝金を出すことにした。

式で出された料理はポロー（polo）や肉スープだった。若者の間では10種類を越える野菜炒めのメニューが付け加えられた。若者は式の始まる前に新郎の家に集まり、出された料理をつまみながらお酒を飲んだり（新郎は飲んでいなかった）、トランプを使ってギャンブルをしたりした。

結婚式の日に行われるニカは、イスラム教の朝の祈りをすませ、男性客の接待が終わった後（朝8時ごろ）に新婦の家で行われた。ニカの司会をしてくれたイمام（宗教指導者）と一緒に来た弟子3人に50元ずつの謝金も渡された。司会者は新郎が住む村のモスクの宗教指導者だった。昼ごろ

になると女性客ら(新婦から招待された客も含む)が自らのダストハン(dastuhan, お祝い品を包んだ物)を持って新郎の家を訪れた。彼女たちはポーロヤコルダク(kordak)などの料理でもてなされた。

夜3時ごろ、新婦に向かう儀式が始まった。まず、200円でレンタルしたベンツの高級車1台、普通乗用車4台、軽トラック1台、ビデオ撮影の為にバイク1台が用意された。高級車のレンタル料は新郎の付き添いが払ったが、これは付き添い人が新郎にあげる祝い金のかわりだという。同様に他の車両も新郎の友人が用意してくれた。高級車は花や風船で飾られ、フロントガラスのワイパーの部分に赤い布が置かれ、他の車にも同じように赤い布が置かれた。トラックも合わせて6台の車が並べられた。並び順は一番前にトラック、次に高級車、その次に普通乗用車だった。トラックの後ろには3種類のナグラ(太鼓のような楽器)やスナイ(管楽器)が演奏者と共に乗せられた。準備がととのい、出発の時が近づくとも音楽演奏が始まり、新郎の友人らがトラックの後ろに乗って大騒ぎしながら踊った。高級車に乗ったのは赤い花を持って新しいスーツにネクタイ姿の新郎と付添の人、普通乗用車には新郎の母や女性親戚や母の友人が乗った。こうして車は一列に並び新婦の家に向かって出発した。

新婦の村に近づくとも村の若い男性たちが出て来て父の時代と同じように道を塞いだ。新郎の友人2、3人がトラックから降りて、交渉を行った後、一箱のビールを渡すと、道が開けられた。ビールをもらった若者はその日の夜パーティを開いて楽しむらしい。車が新婦の家に到着すると、若者が車から降りて新婦の家の前で10～20分ほど踊ったりして大騒ぎした。その後、新婦の家に入ろうとしたらまた誰かがドアを閉めた。赤い布に茹でた肉を包んであげるとドアが開いた。若者はまた大騒ぎしながら新婦の庭に入り、ふたたび踊った後、新郎が友人らと一緒にウェディングドレス姿の新婦が待つ部屋に入り、赤い花を新婦に捧げた。新婦が花をもらった後、またひとしきり踊りが踊ら

れ、新郎が新婦の右手を持って連れて行こうとしたが、新婦は立たなかった。新郎が新婦に立つよう3回お願いすると、新婦は立ちあがって一緒に庭に出た。庭で彼らを待っていた新婦の両親と泣きながら離別して高級車に乗った。

迎えに来るときと同じように、車を並べて新郎の家に帰ることになった。戻る時は直接帰るのではなく、町全体をひとまわり回った。新郎の家に着くと若い男性達が高級車の脇に集まり、新郎が車から先に降りて新婦の座った側に回り車のドアを開けた。そして新婦が降りる地面に赤い布が敷かれ、新婦はそれを踏みながら降りた。それから新郎新婦は一緒に家に入った。彼らが家に入るとまた大騒ぎしたり踊ったりして二人を祝福し、ようやく式が終わった。これらの全ての過程を雇われたカメラマンがビデオや写真に撮影した。

### Ⅲ. 結婚式の変化とその要因

前節ではひとつの家族の三世代の結婚の過程を紹介した。ここでは上の事例を通じてその中で起きている変化に焦点をあて、その要因を検討しながらウイグル社会における結婚の根本的な変容について考察したい。

#### 1. 変化

##### ①配偶者選択の面での変化

第一世代と第二世代の結婚では結婚相手の選択は知り合い、親戚、両親などの意向で選ばれ、両側の両親さえ反対しなければ結婚が成立した。第一世代の妻の話によると、結婚してから3年間、機会があれば自分の両親の処に逃げたり、見つかって戻されたりした。ある時には家の中で監禁状態にされたこともあった。子供が出来てから逃げるのをやめ、今まで一緒に生活してきた。当時女性には離婚する権利がなく、男性が「タラク(tal-laq)」といわなければ離婚できなかった。

また、結婚相手は第一世代と第二世代の時代では同じ村や近隣の村から選ばれる習慣があった。その原因を尋ねたところ、この地域では「よその

村と結婚したら、服が破れる（喧嘩したとき服が破れるためこの言葉を使う）」と言う諺があったためということだった。第三世代の結婚ではこの状況は変わった。結婚の成立は彼らが一年間付き合った後、心を確かめてから自分らの意図で決められ、両親の承認後に結婚した。もちろんかつてのような両親どうしの交渉だけで成立する結婚も今でも存在しているが、結婚する本人の強い反対があった場合は結婚を阻止できる。

今では結婚に対する法律が整備され、法律では女性の結婚年齢は18歳以上、男性は20歳以上と定められている。第一世代のような12歳での強制的な結婚は許されない。また、法律では女性の様々な権利も認められており、離婚する権利もある。第三世代の場合のように、付き合った後結婚する若者がこの村では数多く見られるようになった。また結婚相手は同村や近所の村にとどまらず、県外にも広がった。例えば、第二世代の夫婦の長男はウルムチ市（アトシュから1500キロ）出身の女性と結婚して、今ウルムチに住んでいる。

## ②結婚にかかる費用と負担、使い道などの面での変化

この点においては三世代の状況は以下の表のようになる：

図1：結婚費用の負担と用途

| 内容        | 世代別 | 第一世代                              | 第二世代  | 第三世代  |
|-----------|-----|-----------------------------------|---|---|
| 婚資        |     | 40Kg小麦(自)                         | 300元(自)                                       | 7000元(自)  |
| イベント      |     | 羊一匹(自), 料理(民), エンターテイメント(民), 他(民) | 羊8-10匹(礼), 料理(自), 酒(自), 服(自), エンターテイメント(自, 民) | 牛や羊(自), 料理や酒(自), 服(自), エンターテイメント(自), 車(自と礼), 招待状(自), ビデオや写真撮影(自), 謝金(自), 他(自) |
| その他       |     | なし                                | 婚約相手の間での礼品交換(自)                               | 婚約相手の間での礼品交換(自), 婚約指輪(自), 結婚証にかかる費用(自), 結婚前の待ち合わせ会(自), 家具や家電製品(自), 他(自)       |
| 礼品としての所得額 |     | なし                                | 羊, 布など  | 約2500元, 布など   |
| 自己負担総決算   |     | 約70kg小麦以下                         | 約500元以下                                       | 15000元以上  |

「注」◆自=結婚する家庭の負担 ◆礼=礼品 ◆民=村の人々

図1からいくつかの変化が明らかである。まず、第一世代では婚資として贈るのは金銭ではなく小麦だったのが、第二世代からは金銭に変わった。婚資の額は時代とともに増えている。例えば、第二世代の時代では婚資として贈った300円で50キロ小麦を買うことができた。これは第一世代の時代で婚資として贈った40キロの小麦に近い水準である。一方、第三世代の時代では7000円で約6000キロの小麦を買うことができる。それぞれの時代での物価の格差があり、第二世代当時と第三世代のときの小麦の値段の格差は約6倍である。この格差を計算に入れても、第二世代より第三世代の方が20倍の婚資が必要であった。この第三世代の婚資の額は、この村の現在の一人当たりの平均年収（1301.95元）の5倍に相当する。

次に、婚資以外の内容や支出が変化している。三世代の婚資以外の支出を比べてみると、第一世代と第二世代の場合それらの総計は婚資の1.7倍弱だったのに対して、第三世代の場合は2.2倍強になった。内容的に見ると、第三世代の時代ではビデオや写真撮影、謝金、様々なレンタル料など、それまでなかった多くの支出項目が増えていることがわかる。さらに、結婚イベント以外の支出も第三世代の方が多い。

最後に、結婚に使う費用の負担に注目して見よう。いずれの時代も婚資を負担するのは当事者の家族だったが、婚資以外の負担では変化が目立つ。第一世代では料理に使う一匹の羊以外は、エンターテイメントの費用や料理の材料は村の人々が用意してくれた。第二世代では結婚で使う羊などは友人や親戚からの礼品だった、エンターテイメントの時にかかる音楽演奏者への謝金や料理の材料の一部は参加者が負担してくれた。お酒は若い男性だけが飲むので、新郎が自分の貯金から両親に知らせないで買ったという。また第一世代と第二世代ではニカでの宗教指導者、調理師、音楽演奏者、役人などに対する謝金を出す習慣がなく、それらの人びとは無償でサービスするのがふつうだったため、当事者にあまり負担がかからなかった。第三世代ではすべての費用が結婚する家族の負担

になった。かかる費用は結婚する家族が参加人数や規模を事前に予想しながらお金を用意しなければならなかった。ニカでの宗教指導者、音楽演奏者、調理師、撮影者などに対する謝金も結婚前に交渉が行われて決められた。第一世代や第二世代では招待客への結婚の通知がモスクや家への訪問によって行われたため、費用がかからなかったのが、第三世代の場合では招待状を買って招待客に通知したため、金銭的負担がかかった。第三世代では礼品として贈られた現金2500元が家族の負担を軽減することになったが、これは予想外の収入であり、借金を返したり家具や家電製品を買うために使われた。

### ③結婚に参加する人の規模の変化

第一世代では参加者は村の子供から年寄りまでの人々を中心に、近所の村の友人が加わるかたちで形成された。参加者に対する規制がなく、参加したい人は誰でも参加できた。彼らの話によるとこの時代には結婚する家庭と喧嘩で関係が悪くなっていた家庭も、村のアクサカル (aqsaqal, 白ひげの意で、村のまとめ役を果たす年寄りの人々を表す) たちの説得を通じて式に呼ばれ、この場をかりて関係を修復することもあったようだ。ニカの司会、音楽演奏者、ゲームの司会など、いろいろな役を務める人は村の人々の中から選ばれた。第二世代では参加者の中心は第一世代と変わらないが、遠いところの友人たちも式に招待され、全体の人数も第一世代より多かった。また、音楽演奏者は友人の紹介でカシュガル市から呼ばれた。第三世代の場合では参加者は招待状をもらった人に限られ、その招待客は結婚当事者の家族によって選ばれた。それは主に親戚、近所、両親の友人、新郎新婦の友人、同級生などから選ばれたが、その範囲は両親が招待する人と新郎新婦が招待する人で異なり、例えば同じ家族の中で両親が招待されているのに子供が招待されなかったり、子供が招待されてもその両親が招待されなかったりする場合もあった。

### ④結婚式の内容での変化(服装、音楽、料理、イベント内容など)

三世代の結婚式の構成については大きな変化は見られないが、個々の内容では明確な変化が目立つ。まず、新郎新婦の結婚式で着た服装を比べて見よう。第一世代では新郎新婦は日常服姿で結婚式を過ごした。彼らの話によると、当時村の多くの人が貧しく新しい服を買う余裕がなかったため、これが一般的であり、新しい服を着るのは村で数少ないバイ (bay, かなりのお金と土地持つ人、官僚などを示す) だけだったようだ。

第二世代の場合では、町役場からもらったチケットで布を買って、洋服屋に頼み新しい服を作ってもらった。服のデザインは特別ではなく、一般に着ている服と同じだった。彼の話によると当時彼が町役人を勤めていたので、チケットを他の人より多くもらい一着作ることができた。一般人は新婦だけが新しい一着で、新郎はズボンだけ新しく作るのが一般的だったそうだ。

第三世代では新郎は新婦がカシュガル市で買ってくれた新しいスーツ、シャツ、ネクタイ、靴の姿で、新婦は新郎がレンタルしてくれたウェディングドレスと婚資で買ったアクセサリーなどを付けた。また、結婚式の日の朝に美容院へ行って髪にパーマかけたり化粧してもらったりした。新郎新婦はこの日誰よりも輝いていたという。

次に、結婚式で演奏される音楽については以下のような変化がおきている。第一世代では音楽はその村に住んでいた楽器演奏ができる人の伴奏で行われ、歌う人は演奏者だけではなく、参加者もそれに加わった。歌はほとんど地元の民謡で、それに合わせてすべての参加者が伝統舞踊を踊った。楽器演奏は式場(新郎の家)だけで行われ、嫁を迎えに行くときには伴奏なしで歌った。楽器演奏者に謝金を出す習慣がなく、盛り上がるの程度によって集まったお金や物が謝金として渡された。

第二世代の結婚式では演奏者がカシュガル市から来たため、民謡の種類や楽器の数も増えていて、嫁を迎える時にも伴奏が加えられたが、本質的な変化はあまり目立たない。

これに比べて第三世代の場合にはより大きな変化が感じられる。第三世代では楽器は伝統楽器ではなく電子ピアノだった。嫁を迎えに行くときナグラやスナイなどの伝統楽器もあったが、これらの楽器はこの地方で普及した楽器ではなく、カシュガル市で大きな祭りのときに使う楽器である。曲は民謡以外にウイグルポピュラー音楽やBGMで流される外国のディスコ音楽だった。演奏者は地元の若者で構成されたアマチュアバンドだった。式で歌う人はバンドのメンバーに限られ、彼ら以外の人が歌うことは許さなかった。参加者の楽しみは音楽に合わせて踊ることと聴くことだった。伝統舞踊以外に社交ダンスやディスコも踊られた。また、楽器演奏者と結婚前に契約が行われた。第三世代での以上のような変化から、結婚式の音楽に対する外来音楽の影響が強まっている傾向、この場での音楽が若者中心になっている傾向、結婚式が音楽演奏者にとって一つのビジネスとなっている傾向などが見て取れる。

次に、式での料理での変化を探って見よう。第一世代の時にはヤーマ、肉スープ、ナンなどの料理で客らを接待した。第二世代では第一世代と同じだが、若者の間ではお酒を飲むこともあった。第三世代ではヤーマの代わりにポーロが出された。女性客にはポーロ以外にコルダックなどが出された。また、若者の間では様々な野菜炒めが出され、酒のつまみとして供された。彼らの話によると、第一世代と第二世代の時代ではポーロの材料となるお米、油などはとても高いので、大勢の人にこれを作って供するのが難しかった。ポーロは彼らの時代では、遠い所から来た珍客を接待する時だけのために作る料理だったらしい。今ではお米や油の価格がそれほど高くないため、日常の家庭生活でもよく食べている。第三世代にとってこれらの料理で大勢の客を接待することは大きな負担ではない。第一世代と第二世代では、式で供される料理は男女、年齢、時間帯などを問わず皆同じだったのが、第三世代の場合では違いが見られることは明らかである。

最後に、イベントの内容でのいくつかの変化に

注目したい。一つは、三世代通じて結婚日の前日に行われたミヘマンハナケズテシュというイベントにおいて、第一および第二世代の時に行われたゲームが第三世代の式では行われなくなった。このゲームはかつてのウイグル人社会では、結婚式だけではなくメシュレップやノールズなどの祭りでも常に行われていたゲームである。現在ではこのゲームはウイグル人社会の中から消えつつある一方、2年前からこのゲームは新疆電視台（国営テレビ放送局）のテレビ番組になっている。このゲームの盛衰は明らかにウイグル人の生活形態の変化と連動するものである。

もう一つは、嫁を迎えに行く際に、第一世代と第二世代では新婦を馬に乗せ、新婦の叔父が騎馬しながら新郎の家に連れてきた。それが第三世代の場合では新郎新婦ともに高級車に乗ってきた。このような変化には欧米の結婚式の影響が感じられる。

## 2. 変化の要因

### ①生活環境の変化

この村の状況を見ると、交通手段、電気、メディア環境、教育、貿易、文化交流などの生活環境は日々改善している。このような変化は人々の生活習慣や価値観などに直接間接に影響を与えるのは当然のことである。本稿で示した三世代の結婚においても生活環境の明確な影響が見られる。

まず、交通手段が便利になることによって人々の活動範囲が広がり、活動内容も変わってくる。第一世代と第二世代の結婚が行われた当時は、交通手段が不便なため、村人の一部（数少ない商人、政府から選ばれた成績よい学生、運転手など）を除けば、ほとんどの人の活動範囲は村周辺の40キロくらいの範囲内にとどまっていた。その活動内容は、村内での農業、産品の地域周辺での売買、娯楽としては地域の祭り、結婚式、トランプ遊びなどであった。こうした状況の中で、人々は結婚式などの場を借りて、労働の疲れをとり寂しい生活を慰めてきた。そのため、村の人々にとって結婚は非常に重要なイベントとなり、皆の協力で行

われた。結婚式でのゲームなどのルールはその村の規則と同じように取り扱い、皆がそれに従わなければならなかった。また、交通が不便なため土産品以外の物の購入が難しかったので、結婚は簡単に行われた。さらに、他の地域との交流も少なく、文化的な影響をあまり受けなかった。

ところが第三世代の時代になると交通手段が発達し、村人の活動範囲は広がった。自治区全体で行ったり来たりする人の人数が増えた。活動内容も、年齢、性別、職業などの違いによって多様になった。こうした変化によって結婚式の村びとに対する重要性は弱まり、村びとがそれに無償でサービスすることが少なくなった。その反対に、宗教指導者や調理師、音楽演奏者、役人などに謝金を出すことがふつうになったため、結婚当事者の負担が増えた。また、交通が便利になることによって物の購入が容易になり、より贅沢な結婚式を行うことが出来るようになった。また、活動範囲が広がることによって人々の視野が広がり、結婚式に様々な新しい内容が盛り込まれるようになった。

次に、1980年代後半以降のこの村の教育環境の変化が大きい。それ以前は学校の数はいくつか、高校に進学するためには村から30キロ離れたアトシュ市に住み込んで学校に通わねばならなかった。農民にとって家族の誰かが遠い所に住むことは労働力の不足につながるため、子供を高校に進学させる家の数は少なかった。教師や教材などのレベルも他の地域に比べると低く、子供達に満足な教育を受けさせる保証もなかった。また、女性に対しては「そんなに教育受ける必要はない、家事をきちんとやって妻としての役目を果たせばいい」という意識が強く、女性が教育を受けられなかったケースも多かった。

1980年代後半以降はこうした状況もすっかり変わった。政府が力を入れて学校の数を増やし、町にある唯一の中学校に高校を併設し、町の何箇所かに中学を設立させた。教師や教材、教育設備などの面でも進歩が見られ、以前よりも良い環境で教育が受けられるようになっている。法律では11

年の義務教育制度が定まり、また、社会競争の影響で高い教育を受けるほど良い就職が出来るようになってきたため、家庭内でも教育に力を入れるようになっている。これらの影響で、大学まで進学する人の数は年々増え、自治区内の大学だけではなく全国の名門大学に入学する学生も数多く見られるようになった。このような変化によって、人々の物事に対する価値観が変わり、時間、資金、娯楽など様々な面においてより効率的に考えをするようになり、また様々な外来文化を積極的に取り入れるようにもなった。第三世代の結婚式ではこの要因の影響が明らかに現れている。

最後に、メディア環境が以前より良くなっている。テレビ放送などマスメディアが外国番組の忠実な吹き替えを放映することによって、世界の様々な事情を知ることが出来るようになった。またビデオやVCDなどの普及によって、外国の映画や音楽などの様々なエンターテインメントを楽しむことが出来るようになり、異国の意識や価値観などに触れる機会が増えた。第三世代の結婚式での新婦のウェディングドレスや、飾られた高級車で新婦を迎えに行き一緒に乗って戻るなどの内容は、こうした影響の表れと言える。このような娯楽の増加はまた、結婚式がもっていた娯楽としての意味合いを低減させることにもなっている。

## ②宗教規律のゆるみ

ここで紹介した村に限らず、ウイグル人社会全体においてイスラム教の宗教規律のゆるみが目につくようになっている。その原因は第一に、他のイスラム国家との交流が少なくなり、特に1970年前後の約10年にわたる「文化大革命」の時代は外国との交流が一切なく、完全に外部と切り離された状態であった。1979年以降は外国との交流が再開されたが、アラブ諸国との距離が遠いため、国境に近い中央アジアの国々や同じトルコ系民族である旧ソ連に属するカザフスタン、ウズベキスタンなどの最近独立した国々との交流が多かった。これらの国々ではイスラム教の世俗化が進んでおり、ウイグル人社会もこの影響を受けている。



第二に、政府はイスラム法より国の政策を優先するため、宗教団体が政府の政策に干渉することを禁じている。イスラム国家のように勤務時間をお祈り時間に合わせてくれないため、国家公務員はお祈りをする時間が保証されていない。また宗教教育を受けられる機関が少なく、宗教教育を受けることのできる人が限られる。

第三に、昔は社会全体に対する宗教の干渉が多く、技術の進歩や外来文化を受け入れることに対して反対してきた。現在では、宗教のこうした干渉がウイグル人和其他の民族や外国との間で様々な面での格差を生じさせた主要因と考える人が増えており、ウイグル人が進歩するために宗教の干渉をなるべく少なくしようという動きが見られるようになっている。

このようなことから、ウイグル人は長い間信仰してきたイスラム教の道義を守りながらも、その厳格な面についてはそれほど固執しない姿勢をとっている。例であげた村でもこのような宗教規律のゆるみが生じており、三世代の結婚式の変化においてもその影響が見られる。例えば、第二世代と第三世代の結婚式では、イスラム教で禁じられている酒を飲むような現象が見られた。また第一世代や第二世代の時代では結婚式の多くの場面で女性の参加が禁じられたり、男女が同席することが禁じられていたが、第三世代の結婚式では、特に若者の間で男女同じ場に参加することが多くなり、一緒に社交ダンスを踊ることに対しても違和感を感じなくなった。さらに第三世代の結婚式では音楽、ダンス、服装など様々な面で西洋近代的な文化要素が見られるようになった。彼らの話によると、昔は結婚式のいろいろな場面で説教が多く、結婚のごちそうが終わった後、コーランが良く読める人が長い祈りを唱えて、一緒にドウア（dua、イスラム教で祈り終わった後にする動作）をしてから退場することが多かった。今ではコーランを読むことは朝のニカのときだけになり、ごちそうの後コーランを読まずドウアだけやって解散することになった。筆者がかつてイスラム教の説教で聴いた話では、イスラム教では宗教

指導者は様々な宗教行事（ニカ、お葬式、宗教教育等等）での務めに対する謝金をもらうことは禁じられているということだったが、第三世代の結婚式ではニカに際して宗教指導者にも謝金が支払われた。こうした点以外にも第三世代の結婚式では様々な面で世俗的な要素が目立っている。

### ③社会関係

前に述べたような人々の活動範囲や活動内容の変化によって、人びとの付き合いの範囲が広がった。以前は村の人のほとんどが農業を中心に活動していた。当時は行政や教育、商業などの職についている人でも農作業に参加することが多く、人びとの主な社会関係は村の周辺、つまり農業をめぐる狭い活動範囲内での親族、近隣、友人、同じ村の人（yurt）、親方と弟子（先生と生徒）、同級生などが中心だった。これらの血縁、地縁、子弟関係でつながる人間関係はどれも等しく重要で、いずれも良いつきあいをすべき社会関係だった。上下関係では若者は年輩者に対して、子供は親に対して、弟子は親方に対してどんな事情があっても尊敬の態度をとらなければならなかった。男女関係も厳しく、多くの場で女性の発言権がなく、すべての決定は男性が相談して決め、女性はそれに従わねばならなかった。

現在でもこうした社会関係の基本は継承されているが、活動範囲や活動内容の変化によって変化している点も数多くある。例えば、農業以外の職業につく人が増え、特に行政や教育、商業などの職業はより専門化し、農業に割く時間がなくなりつつある。つまりそれぞれの職場での活動が増え、職場での新たな人間関係が生まれている。友人関係や親族関係も村とその周辺だけではなく、自治区全域さらには全国にまで広がるようになってきた。就学の範囲も広がり、先生と生徒や同級者の間の関係もその広がりの方が大きくなっている。上下関係では年齢を重視することがいぜん多いが、職場によっては年齢にかかわらず上司に対して尊敬の姿勢をとることもある。男女関係では教育制度の充実によって高い能力を持つ女性が増え、

様々な職場で活躍しているため、女性も物事の決定に加わる力を持つことになった。これ以外にも、政府による様々な行政改革、憲法改革、経済改革の影響で、人々は高い経済力、知識力、権力や社会地位を目指すようになり、競争的な社会環境が出現している。そのことが、活動範囲の広がりと一緒に、地域社会のまとまりをかつてに比べて弱くしているものと考えられる。

このような社会関係の結婚式への影響は数多く見られる。まず、結婚式に参加する範囲は第一世代や第二世代では村や周辺地域の人々に限られたが、第三世代では結婚当事者と付き合いがある人々から構成された。礼品の価格も付き合い関係や親戚関係の程度によって異なるだけでなく、礼品交換的な社会習慣が生まれている。これは、例えばAさんが結婚したときBさんがある金額の物やお金を礼品としてあげたら、Bさんが結婚したときにAさんは同じ金額の物や金銭をあげるという社会習慣である。これは礼品の面だけではなく、結婚式の手伝いなどでも現れている。次に、結婚参加者は第一世代や第二世代の場合にはほとんどお互い顔見知りの人々から構成されたので、種々のイベントにおいてまとまりやすく、ミヘマンハナケズテシュでのゲームのようなイベントがやりやすかった。第三世代になると参加者の住む場所、生活環境、結婚当事者との関係などで異なる点が多く、お互い知らない人々が数多く参加するようになったため、ゲームがその会衆にそぐわないものになり行われなくなった。最後に、参加者の社会活動内容の変化によって、結婚の時間帯も変化している。第一世代や第二世代の時には、参加者のほとんどが農民だったため、結婚の時期は季節や断食月などを考えながら決められた。第三世代の結婚式では、参加者の社会活動内容が様々であったため、参加者多数の時間に合わせなければならなくなった。この影響で現在ほとんどの結婚式は休日に行われるようになっている。また参加者の参加できる時間や参加者の住む場所と式場の距離も異なることによって、イベントの時間が短縮されたり、伸ばしたりすることもここに

あげた事例のみならずよく見られることになっている。

#### ④家族関係

地域社会のまとまりの低下とともに、親子間の関係も変化してきている。この主な原因の一つは価値観の変化であり、「何でも親や年輩者に従う」というかつての理念にかわり、「物事を現実的、自己利益的に考えよ」という理念を持つ人が段々増えている。もう一つは、親や村社会と長い時間離れて暮らす若者が増えて、親のコントロールを受け難くなったことである。これの影響で親と別の家で暮らす若者が増えて、子育てにしても、人間関係にしても、仕事選びにしても、自らの好みにあわせて生活することが多くなった。かつてウイグル人の中では父の職を長男や家族の誰かが継ぐ習慣があった。現在の激しい競争の中では伝統的な職業だけでは豊かにならないため、より良い生活を目指して親の反対にもかかわらず自分で職を選ぶようになった。

こうした変化に伴い、第一世代や第二世代のように結婚相手を親が選ぶという事態から、第三世代のように結婚相手を自分で選び、結婚内容を自分で決めるというあり方に変化してきている。以前は自らの親戚と結婚することもあったが、知識の高まりによってこれは科学的にも道徳的にも不適切だと考えられるようになり、このような結婚はなくなりつつある。またかつてはすべての結婚資金を親が用意するのが義務であるという認識が強かったので、若者は親と一緒に働いて一緒にお金を稼ぎ結婚費用を捻出してきた。今では、親と離れて生活していること、また結婚にかかる費用の増加、親と子供の生活環境や好みの違いなどから、結婚費用の一部を若者が自分で用意することになった。

以上、例示した三世代にわたる結婚式の変化とその要因について考察してきた。ここ20年の間に中国では急速な経済発展や様々な行政、経済、政治改革が進行し、社会全体における生活環境、宗

教規律、社会関係、家族関係などの面で大きな変化が目立つようになっている。それに伴って人々の活動範囲が広がり、またその活動内容も多様になり、物事に対する価値観、理念なども変わりつつある。

こうした状況のもとで民族の伝統文化もまた変化を避けられない状態にある。例示した三世代の結婚式で言えば、特に第三世代の結婚式に変化が顕著に現われている。そこでは式の形式面だけでなく、そのもつ意味あいにも変化が認められる。かつて人々の活動範囲が狭く活動内容も単純だった時代には、娯楽の場が少なく、結婚式は当事者にとって重要な儀礼というだけではなく、村びと全体にとっても重要な、祭りに相当するような行事だった。そのために式は村びとの協力のもとで行い、式場は祝祭イベントの舞台となり、そのようにして結婚式の伝統的な内容が維持されてきた。しかし現在では、人々の活動範囲の広がりや活動内容の多様化によって娯楽の場が増え、結婚式だけが唯一の楽しみでなくなっている。

結婚式はウイグルの人びとにとって、いぜん重要な人生の節目であり、大切なお祝いの場であり続けているが、村びとすべての楽しみの中から、結婚の当事者、とりわけ新郎新婦本人とそれにつながる人たちにとってのそれへと、その意味あいを変えてきている。かつてのように同じ町や村の人びとが積極的に責任を持って楽しみをつくり出すのではなく、結婚当事者が自ら資金や場所などの負担を提供して楽しい場をつくり出す、というあり方になってきているのである。

## おわりに

本稿では中国新疆ウイグル自治区ケゼルスケルゲズ自治州ウスチュンアトシュ町に属するオチャという村に住むウイグル人家族三世代の結婚式を事例として、中国内のウイグル人社会における文化的変容の一面を考察した。ここであげた事例は、新疆ウイグル自治区に住むウイグル人社会を代表するものであるわけでは決していない。新疆ウイグ

ル自治区内でも自然環境や社会環境、生活環境の違いによって、各地区でそれぞれの結婚に関する習慣は異なる。しかし筆者自身の経験や、自治区内の各地で出会った年輩者の話、また種々の資料などから見て、本稿で取りあげた三世代の事例はウイグル人社会における結婚の変化をよく表す事例と言える。これまで筆者が参加した結婚式は、自治区内の北、東、南部の各所に及ぶが、すべての地域で本稿の事例と同じように大勢の人が参加し、大勢の人が楽しみ、町なかでも村でも大騒ぎしながら周りに結婚の喜びを伝えるのが常であった。どの地域の結婚式においても音楽が欠かせない存在となり、音楽の質にかかわらず、参加者全員が音楽にあわせて踊っていた。式で流される音楽は式場周辺にまで響きわたるのが一般的で、それを迷惑に感じる人は少ない。結婚当事者も自分の結婚に大勢の人が参加して盛り上がるのを望む。こうした姿は、たとえばアブドゥウケリム・ラフマンらがまとめた『ウイグル族の習俗』のなかの「結婚式」の項目で書かれた様子と多くのところ一致する。またどの年輩者に尋ねて聞いても、結婚の昔の事情は本稿で取り上げた第一世代の様相と近いものであった。

ウイグル人社会における結婚式は楽しむ場であり、楽しければ何でも結婚に取り入れるのが彼らの習慣である。結婚式の大枠はかつての伝統を守りながらも、細かい内容においては様々な外来文化を受容しているのがウイグル人の結婚式の現状と考えられる。

## 注

- 1) 「上阿図什基本状況」(上阿図什人民政府発表, 2004年) より。

## 参考文献

- アブドゥウケリム・ラフマン, レヴェイドウラ・ヘンドラ, シェレブ・ホシュタル『ウイグル族の習俗』1996年, 新疆青少年出版社 (Abudukerim Rahman, Revaydulla Hamdulla & Sharip Hushtar, *Uyghur Orup-Adatleri*)